



書評・新刊紹介

高橋昭善・大森雄治 著

三浦半島海藻図鑑 —海藻は海からの手紙—

三浦半島は、東京湾湾口に位置しているために、半島の東側・東京湾内に面した「内湾性地域」、半島突端部の外洋に面した「外湾性地域」、半島の西側・相模湾に面した「外湾性地域」に分けられ、それぞれの地域ごとに環境条件が異なっているため、違った海藻類が分布している。そのために、比較的狭い地域でありながら、数多くの海藻類が分布し、日本全域に生育している種類も多数見られている。

図鑑の巻末につけられている「三浦半島海藻目録」には、緑藻類が 57 種類、褐藻類が 83 種類、紅藻類が 241 種類挙げられている。これらの中から、この地域で普通に見られる種類を選び、27 種類の緑藻類、53 種類の褐藻類、101 種類の紅藻類が、まとめられている。B6 判という大きさは、決して大きいものではないが、多少無理をすれば上着のポケットに入れることもでき、野外での利用に便利である。しかも、このような大きさでありながら、1 頁に 1 種類ずつが載せられているので、写真が大きく、見易い体裁になっている。

また、この図鑑には、「海藻は海からの手紙」という副題がつけられている。この本の「はじめ」の中に「アラメやカジメは海中の透明度や魚介類の豊かさ、アオサ類は海の汚染、ワカメは海水温、アマノリ類は海水の栄養塩類濃度、稀少種は潮流や気候の変動など、貴重な海の情報をもたらしてくれる。まさに、海藻は海からの手紙である」と述べられているが、この一文には、いみじくも著者の海藻に対する姿勢がにじみ出ている。

著者の一人、高橋さんは、1997 年に小学校校長の職を退職なさるまで、長い間横浜市で小学校の教壇に立たれるかたわら、地元、三浦半島海藻類の調査を精力的にお進めになり続け、1982 年には「神奈川県三浦半島沿岸海藻目録」(51 pp.) を、1988 年には、これに手を加えた「神奈川県沿岸海藻目録」(60 pp.) を自費



横須賀市自然・人文博物館出版、B6 判、総頁 208 頁、2009 年 2 月、頒布価格 800 円 (税込、送料別)、ISBN なし

で出版なさっている。このようなお仕事とともに、長年、相模湾海藻調査会を主宰なさりながら、多くの海藻愛好家の指導ばかりでなく、自然が好きな子供たちへ海藻観察の手ほどきをなさってきた方でもある。そのため、この本の随所に細かい心遣いがにじみ出ており、例えば、全体の写真からでは名前が付け難いホンダワラの仲間では、それぞれの特徴が出ている拡大写真が付けられており、区別の見分けがしやすくなっている (右写真)。

表日本の太平洋側中部で海藻類の観察をなさる方々ばかりでなく、全国の海藻愛好家にとっても非常に便利な手引き書として利用できる図鑑である。しかも、博物館の出版となっているために、頒布価格が 800 円という安さも嬉しい。ご希望の方は、下記に問い合わせてください：

238-0016 横須賀市深田台 95 横須賀市自然・人文博物館 ☎ 046-824-3688

(大房 剛, 元山本海苔研究所)



神戸大学水圏光合成生物研究グループ 編

水環境の今と未来 —藻類と植物のできること—

本書は、2009 年 1 月に神戸大学において開催された公開シンポジウムの内容をもとに執筆されたものである。陸域・海域の水環境の現状と問題点、藻類や水生植物の生理特性、さらに藻類の生物工学的な利用に向けた研究の動向や課題など、多岐にわたったテーマについて、藻類や水生植物に馴染みのない読者にもわかりやすく解説されている。第 1 章では、大阪湾が大型藻類にとっていかに生育しにくい環境であるかを分析し、実際に行われている環境改善の取り組みについて紹介している。第 2、3 章では、水生植物の多様性や生理特性、保全や利用の取り組みとその問題点について解説されている。第 4、5 章では、藻類を介した水圏環境の再生について、垂直護岸における藻場造成、アオサの有効利用による循環型社会形成、発電所の冷却水としての海洋深層水利用など、ユニークな試みが提言されている。第 6～8 章では、藻類を用いた環境浄化、金属資源回収、液体燃料や不飽和脂肪



株式会社生物研究社出版、B6 判、総頁 120 頁、2009 年 3 月、定価 1,890 円 (税込)、ISBN 978-4-915342-53-0

酸などの有用物質合成など、最先端の話題を提供している。各章がコンパクトにまとまっており、水圏環境における藻類や水生植物の重要性や生物資源としての可能性を学ぶための導入書として最適であるといえよう。

(神谷充伸)